

東洋医学漢文入門

岩井佑泉編

推  
氣  
会



# 前 言

東洋医学の古典文献は、多く「漢文」で書かれている。漢文とは言うまでもなく中国の古代の文章語である。ところが漢文は普通の日本の中学・高校では「国語」（日本語！）の一科目として学ばれ、教える者も教材を「訓読」という日本語にあてはめる方法に終始することが多い。これでは漢文はわからないのが当たり前であろう。英語の教材の場合は単語の意味を調べ、英文法によって十分に分析し、最後に日本語に翻訳するが、これが初心者が外国語を学ぶ順序というものである。漢学が学問の主流であった江戸時代の方法で、日常的に漢文に接することさえまれな現代人にどうして古代の外国語が理解できるというのだろうか。

漢文は構造がきわめて簡潔で表象性が強いために、日常会話に用いる言語がまったく異なる諸民族の間で共通の文章語として千数百年にわたって用いられたことは事実であるが、その漢文を生み出した中国で、現在、「文言」（文章語＝漢文）を解釈するために大変な努力が支払われていることも無視できない。祖先が漢文に慣れ親しんでいたという伝統に安住する事なく、むしろ現代中国の、とくに伝統医学にたずさわる先達の実績を範として、東洋医学に関心を持つ方が古典文献を読むための足掛かりを作りたい、というのがあえて本書を出そうという動機である。

最も参考としたのは段逸山主編『医古文』（人民衛生1986年）下編であり、版本学については、馬継興著『中医文献学』（上海科技1990年）によっている。校勘、訓詁などは両書を参照した。その結果として医古文学と中医文献学を合わせて略述しているが原書は800頁以上の分量であり、本書はわずかな「入門ノート」に過ぎない。また錢超塵『内経語言研究』（人民衛生1990年）に負う所が大であり、時間詞・地位詞は楊伯峻『文言文法』（中華書局香港1972年）を援用した。

なお本書の必要性を認められ、怠惰な著者を励まして下さった東京医療福祉専門学校の山口秀敏先生に心からお礼を申し上げる。

1994. 2. 26 東京 岩井 佑泉

## 目 次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 第1章 楽しい文字学                 | 1  |
| 1. なぜ文字学を学ぶのか?             | 1  |
| 2. 文字学の成立                  | 1  |
| 3. 文字学資料を使って医書を読む          | 2  |
| 4. 文字学資料の常用術語              | 4  |
| 第2章 面白語法学その1（詞法）           | 5  |
| 1. 字と詞は同じものか?              | 5  |
| 2. 詞のまとまりが句子（文）である         | 5  |
| 3. それではまず詞法から              | 6  |
| 4. 名詞にもいろいろある              | 6  |
| 5. 人称代詞も指示代詞も疑問代詞もみな代詞     | 7  |
| 6. 動詞もさまざま                 | 7  |
| 7. 副詞もいろいろ                 | 8  |
| 8. 於、以、爲、與の四字を押さえれば介詞はわかる  | 8  |
| 9. 連詞も分類して覚える              | 8  |
| 10. あとは助詞さえわかればこっちのもの      | 8  |
| 11. 以、爲、之など詞類間に使われるものをチェック | 9  |
| 第3章 面白語法学その2（句法）           | 10 |
| 1. 句子を構成する要素、句子成分とは?       | 10 |
| 2. 句子成分は詞序を決定する?           | 11 |
| 3. 句子にもいろいろあるのだ!           | 12 |
| 4. 句子が句子を構成している!           | 12 |
| 語法による原典修正の例                | 13 |
| ※演習—詞類と句子成分（『素問』微四失論の例）    | 14 |
| 第4章 わくわく修辞法                | 16 |
| 1. 修辞?修辞学?修辞法?             | 16 |
| 2. まわりくどい言い方—引用、委婉、割裂      | 16 |
| 3. 様子を表す言い方—比喻、模状、借代、相形    | 17 |
| 4. 変化を持たせる言い方—避複、錯綜、分承、倒装  | 17 |
| 5. 引き締まった言い方—省略、挙隅、互備      | 18 |
| 6. 詞句を揃えた言い方—対偶、排比、反復      | 19 |
| 7. 立て板に水の言い回し—層遞、頂真、共用     | 19 |
| 『素問』『靈樞』に見る引用例             | 20 |

|                     |       |    |
|---------------------|-------|----|
| 第5章 書物の生命を知る版本学(1)  | ----- | 21 |
| 1. なぜ版本学を学ぶのか       | ----- | 21 |
| 2. 簡冊に始まる           | ----- | 22 |
| 3. 巻軸の写本時代(三~十世紀)   | ----- | 23 |
| 4. 木版綴じ本の出現まで       | ----- | 24 |
| 第6章 書物の生命を知る版本学(2)  | ----- | 25 |
| 1. 冊子本の装丁           | ----- | 25 |
| 2. 版本の款識            | ----- | 26 |
| 3. 主要医書の版本の沿革       | ----- | 27 |
| (1) 北宋および南宋刊行の医書    | ----- | 27 |
| (2) 元・明および清刊行の医書    | ----- | 28 |
| (3) 日本刊行の医書         | ----- | 28 |
| 第7章 校勘—書物の病を治す方法    | ----- | 29 |
| 1. 校勘は書物のあるべき姿に戻す作業 | ----- | 29 |
| 2. 校勘の種類            | ----- | 30 |
| 3. 校勘の作業対象—書物の病の種類  | ----- | 31 |
| 4. 校勘の注記方式          | ----- | 32 |
| 第8章 訓詁—書物の生命を活かす方法  | ----- | 33 |
| 1. 訓詁は古医籍解読の方法      | ----- | 33 |
| 2. 医籍訓詁の流れ          | ----- | 34 |
| (1) 「小針解」と「針解」      | ----- | 34 |
| (2) 全元起の『素問』注       | ----- | 34 |
| (3) 楊上善の『太素』注       | ----- | 34 |
| (4) 王冰の『素問』注        | ----- | 35 |
| (5) 林億等の「新校正」注      | ----- | 35 |
| 3. 訓詁の方法—詞義解釈の実際    | ----- | 36 |

## 楽しい文字学

### 1. なぜ文字学を学ぶのか？

文字学とは「文字の起源、発展、性質、体系、文字の形、音、義の関係、正字法や、それぞれの文字の変化の模様を研究する」言語学の一部門である(『辞海』)。中国では文字学は訓詁学、音韻学とともに「小学」と呼ばれていた。清末に章炳麟によって「語言文字之学」と名づけられ、近代的な文字学となった。

東洋医学は主に『素問』『靈樞』『難経』『傷寒論』『神農本草経』等の研究注解の上に成立し、それらの文献は中国語の文語文である「文言」で書かれている。そこで基本的な文字学の知識無しにこういった文献を読むと、とかく誤解が生じる。

凡、痺之類、逢寒、則蟲。逢熱、則縱。(蟲、謂皮中如蟲行。) — 『素問』痺論

カッコの中は王冰の注。「蟲す」とは皮の中を虫が這うようであることをいう、と読める。しかし『説文解字』には「疢」字があり、意味は「動病也」。疼に通じ、蟲字は仮借として用いられたことがわかる。文字学の基本工具書である『説文解字』を用い、「仮借」という文字学概念を応用してはじめてその正しい意味は「痛む」であることが知られる例である(孫詒讓 1848~1908『札迻』)。

### 2. 文字学の成立

先秦時代に成立した漢語文献は秦・漢期にはすでに理解困難になっており、意味不明の文字を当時の通用語で通釈する訓詁(古言を訓釈する)の学が起こった。『爾雅』は前200年には成立し儒家によって伝えられた最古の訓詁書で、五経を釈するものであるため経に準ずる扱いを受け、唐末には十二経の一つと認められた。

後漢の許慎の『説文解字』(略して『説文』)は西暦100年頃に成立する。許慎は字義を明らかにするために字形の共通する要素を分類整理し、9353字を540部に分けた。後世の字形の基準となり、字音、字義の記述を包括する。

三世紀の魏では『爾雅』を増補した『広雅』(18,150字)が、そして六世紀の梁では『説文』の編集方式による『玉篇』(16,917字)が作られた。

また魏・晋・南北朝にかけて字音によって文字を分類整理する試みが行われ、「韻

書」と呼ばれる字典があらわれて、隋の『切韻』（601年）に集大成される。

十世紀に始まる宋代は貨幣経済と木版印刷術が本格化し、校正医書局が設けられて『素問』『傷寒論』『脈経』などの重要医書が校訂出版されたが、辞書も『説文』の校訂増補版（大徐本）や『切韻』の増訂である『広韻』（1008年）が出された。

清朝の十七世紀末から古典研究が盛んになり、最大の『康熙字典』（47,000字）や訓詁資料の集大成である『経籍纂詁』（1764~1849年）、段玉裁『説文解字注』（1807年）、王念孫『広雅疏証』等が出て、小学の学術水準を高めた。

『説文』が字形の基準としたのは秦の小篆と呼ばれる字体で、ときおり戦国時代の六国の字体である古文、古い秦の字体である籀文を付記するが、これは清朝の金文研究の糸口となった。金文とは上古の青銅器に刻まれた文書の字体である。

清末、薬屋の店頭に出ていた「竜骨」に文字らしいものが刻まれていたことから甲骨文字の研究も始められた。前1300年~1000年頃、商（殷）王朝で毎日占いをした記録が1890年代から大量に出土し、今日までに約一千字が解読されている。

これらの考古学的成果を踏まえ、清朝小学は歴史的評価と批判を加えられつつ現代中国語学に継承発展を遂げた。

### 3. 文字学資料を使って医書を読む

(1) 其氣，九州，九竅，五藏，十二節，皆通于天氣。（外布九州，而内應九竅。）

—『素問』生氣通天論

俞樾（1821~1907年）は『讀書余録』に「内經素問」の項およそ四十八条をあげて不審な点を論じている。その中で王冰注の「外は九州に布き、内は九竅に応ず」を取り上げ、「謹みて按ずるに、九竅と九州は初めより相応せず」「今按ずるに九竅の二字は実は衍文にして、九州は即ち九竅なり」といい、「『爾雅』積獸篇（積畜）に曰く、白州は驩なりと。郭注に曰く、州は竅なり」として『爾雅』注の訓詁例を根拠にあげる。そして「古は竅を謂て州と為す。此れに九州と云えば必ず更に九竅と言わざらん。九竅の二字は疑うらくは即ち古注の正文に誤入せる者なり」として九州に対して「九竅の意味である」という古注があったという説を展開する。

(2) 古之治病，惟其移精，變氣，可祝由而已。（无假毒藥，祝説病由，不勞鍼石而已。）

—『素問』移精變氣論

俞樾は『説文』示部に「禱，祝禱なり」とあり、『玉篇』に「袖…古文は禱」とあるので「是の字また袖に作る。此れに由と作る者，即ち袖の省なり」として王冰注は「望文生訓」であるとしている。ちなみに段玉裁『説文解字注』禱字も「祝由」を引

用して、『玉篇』の例をあげている。

(3) 三陽三陰發病，爲偏枯痿易。（易，謂變易常用，而痿弱無力也。）

—『素問』陰陽別論

于鬯（1854~1901年）『香草統校書』は「易は当に読んで瘍と為すべし」とし、『説文』の「瘍，脈瘍なり」，および『広雅』の「瘍，病なり。また痴なりと云う」を引いて証とする。そして二つの病を王冰注で痿一病に解しているのを非とする。

(4) 寒氣客于胃，厥逆從上下，散復出于胃，故爲噫。—『靈樞』口問

多紀元簡（1755~1810年）『靈樞識』は馬蒔注が噫を「不平の声なり」としているのを指摘し、『説文』に「飽食の息なり」とあるのを証として「誤り甚だし」とする。『説文』段注も「『靈樞経』に曰く、五臓の象、心は噫を主る」として九針論を引いている。

(5) 肩不舉，頸不可左右視，治在燔針却刺，以知爲數，以痛爲輸。—『靈樞』経筋

多紀元簡は漢の揚雄（前53~後18年）『方言』に「差，間，知，愈也。南楚に病の愈ゆる者を或るいは之を間と謂い，或いは之を知と謂う。知は通語也。或いは之を慧と謂う」とあるのを引いている。清の錢繹の『方言箋疏』も『素問』刺瘡篇の「一刺則衰，二刺則知，三刺則已」，同じく蔵気法時論の「肝病者，平旦慧」を引いて証とする。王念孫も『広雅疏証』釈詁一下「爲，已，知…慧，間…愈也」の注記に両者を引く。

(6) 上工者十全九，中工者十全八，下工者十全六，此之謂也。—『難経』十三難

多紀元胤（1789~1827年）『難経疏証』は『説文』の「工，巧飾也。人の規槩を有てるを象る。巫と意を同じくす」，『山海経』の「開明の東に巫彭，巫抵，巫陽，巫履，巫凡，巫相有り」という箇所を晋・郭璞の注「皆，神医也」を引証して，「上古の医は必ず祝由を為す故に巫と通称す。…則ち工と巫と其の意は相同じく，上古は俱に医の稱為り」という。

(7) 春脈弦…氣來厭厭聶聶，如循榆葉，曰平。—『難経』十五難

多紀元胤は弟・元堅の説として『太平聖恵方』（992年）に引く同文が「楸楸彙彙」となっていることを指摘し、『広韻』の「欸，葉動貌（兒）」と『説文』の「彙，木葉揺白也（白は貌の省である兒の訛とする）」を証とする。

#### 4. 文字学資料の常用術語

錢超塵『中医古籍訓詁研究』（貴州人民出版社1988年）は『経籍纂詁』凡例にならって「常用訓詁術語」を医書を例に新たに作成した。ここでは見出し字句を『経籍纂詁』凡例にもどし、説明と例文を「常用訓詁術語」より訳出・抜粋した。（）内は補足。

- 某，某也。（AはBである。Aの字義をBで示す。）  
（例—癰，腫也。『説文』）
- 某者某也。（AはBである。同前。）
- 某者某也，某也。（AはBでありCである。Aの字義をBとCで示す。）  
（例—顛，明也，著也。『広雅』）
- 某猶某也。（AはBのようである。）引申や声訓関係を説明する。  
（例—全，猶愈也。『周礼』醫師・鄭玄注  
例—厭，猶掩也。『難経』四十四難・滑寿注
- 某謂某某。（AとはBBをいう。）抽象的一般的なAを具体的なBで解釈する。  
（例—上，謂心胸也。『素問』生氣通天論・王冰注
- 某之言，某也。（AはBの仮借である。）声訓によって仮借を説明する。  
（例—湯之爲言，蕩也。滌蕩腸胃也。『傷寒論』成無己注
- 某某曰某。（AAをBという。）Bの字義をAAで示す。曰=謂之，爲  
（例—多怒曰狂。『素問』腹中論・王冰注  
某某謂之某の例—降注雨水，謂之潦。『本草綱目』水卷五  
某某爲某の例—淫雨爲潦。『本草綱目』水卷五
- 某某，某某之貌。（AAとはBBのような様子である。）  
（例—洒洒，寒貌。『素問』診要經終論・王冰注
- 某讀爲某。（Aは読んでBという。）本字Bをもって通假字Aを解釈する。  
（例—掣，讀爲導。『素問』陰陽応象大論・王冰注  
例—如，讀爲而。『難経』滑寿注
- 某讀如某。（AはBのように読む。）読むべき字音を説明する。  
（例—鼯，臥息也。…讀若汗。『説文』鼻部）
- 某某或爲某某。（AAは別の伝本にBBになっている。異本を指摘する校勘注記。）  
（~~或~~或作蟲。孫詒讓「逢寒則蟲」注記）
- 某誤爲某。（Aを誤ってBとしてしまった。誤伝の指摘。）  
（例—是，誤爲足。俞樾「足生大丁」注記）
- 某當爲某。（AはBであるはずである。）誤字を校勘する訓詁術語。  
（例—七，當爲次。字之誤也。『難経』五十三難「七伝者死」呂広注。

#### 第 2 章

### 面白語法学 その1（詞法）

#### 1. 字と詞は同じものか？

漢字は一字ずつ四角く区切られた空間に書き込まれ、一字ずつ一音節に読まれる。つまり漢字は「書写単位」であり、また「音節単位」でもある。さらに多くの漢字は一字ずつ一つの意味を持つ「意味単位」でもある。しかし厳密には一字では意味単位をなさない例がある。そこで意味の単位を「詞」と呼んで「字」と区別する。

(1) 連綿詞： 近似音の二字，二音節で一つの意味をなす。

連綿詞は二字の音節の構造から①疊字，②双声，③疊韻の三種類に分けられる。

①疊字は同じ字を二つ反復するもので「疊音詞」ともいう。

民病飲積，心痛，耳聾渾渾火焮焮。—『素問』至真要大論

②双声は二字の声母（音節の前半部）が共通なもの。

莫知其形，若神髣髴。—『靈樞』官能

③疊韻は二字の韻母（音節の後半部）が共通なもの。

帝，捧手逡巡，而却曰。—『素問』氣穴論

(2) 偏義複詞： 反義関係の二つの単音詞の一義のみ残すもの（国家，人物）。

決死生，奈何。岐伯曰，形盛，脈細，少氣，不足以息者，危。形瘦，脈大，胸中多氣者，死。—『素問』三部九候論

(3) 兼詞： 一つの字で二つの意味単位を兼ねたもの。

心者，君主之官，神明出焉。『素問』靈蘭秘典論  
この「焉」は「於是」の意味。ほかに兼詞には「諸：之於」，「盍：何不」がある。

#### 2. 詞のまとまりが句子（文）である

意味単位である詞は一定の規則によって，組織，運用され，その規則を語法という。

中国語の語法は「詞法」と「句法」の二部門に分けられる。詞法とは詞の構成と変化の規則、句法とは詞を用いて詞の語法上の統一単位である「句子(文)」を作る規則である。句子とは詞によって作られた言説単位で、何かを言うとき、メッセージの伝達単位を句子という。一つの詞のみで完結する句子を独詞句という。

得神者昌，失神者亡。帝曰。善。 — 『素問』移精變氣論  
人，腸胃長短，受水穀多少，各幾何。然。 — 『難經』四十二難

### 3. それではまず詞法から

中国では1953年から1955年にかけて「中国語に品詞が存在するか？」という大論争が展開され、「品詞はない」という学派に対して「品詞は有る」という学派が多数をしめたので、その結果、すべての詞は次のような詞類に分けられることになった。

#### I. 実詞： 実質的な概念を表し、独詞句を作りえる詞

- (1)名詞 事物，時間，場所などを表す詞。数詞，量詞をふくむ。「天，人，黄帝」
- (2)代詞 人，事物，動作，方法，様態，数量を代替する詞。「我，何」
- (3)動詞 人や事物の行為，存在，所有を表す詞。「問，曰，在，有」
- (4)形容詞 人や事物の性質，形状，行為の状態を表す詞。「高，小」

#### II. 虚詞： 概念を表さないが句子の組み立てを助ける詞

- (5)副詞 動詞，形容詞を修飾する詞。「皆，不」
- (6)介詞 名詞や代詞の前に置かれて場所，方向，対象，比較などを表す詞。「於」
- (7)連詞 詞や句子を連結して一定の語法関係を表す詞。「而，故」
- (8)助詞 詞の後について語気を表す詞。「者，也，哉」 主語の後につく。「之」
- (9)嘆詞 喜怒哀楽の感情，応答などに独立して用いる詞。「嗚呼」

この分類は必ずしも絶対的な一貫した基準を持ったものではないが、実用的な目的のために現在のところ、一応有効であるとされる。

### 4. 名詞にもいろいろある

- (1)形容詞や動詞のようにみえるがじつは名詞  
食飲有節，起居有常。 — 『素問』上古天真論  
其民食魚，而嗜鹹，皆安其處，美其食。 — 『素問』異法方宜論

辛散，酸収，甘緩，苦堅，鹹軟。 — 『素問』歲氣法時論  
(2)時間詞や地位詞も名詞の仲間

- ①時点や地点を表す時は句首におかれる。  
病先發于心，一日而之肺。 — 『靈樞』病伝  
十月萬物陽氣皆傷。 — 『素問』脈解
  - ②時段(期間)や地段(距離)を表すときは動詞の後に置かれる。  
熱病三日，而氣口靜，人迎躁者，取之諸陽。 — 『靈樞』熱病  
人有重身九月而瘡，此爲何也。 — 『素問』奇病論  
所謂三里者，下膝三寸也。 — 『素問』鍼解
  - ③時段詞でも否定の動詞の時はその前に置かれる。  
病脇下滿氣逆，二三歲不已，是爲何病。 — 『素問』奇病
- (3)量詞は普通は名詞の後に置かれる。  
流水千里以外者八升。…半夏五合。 — 『靈樞』邪客

### 5. 人称代詞も指示代詞も疑問代詞もみな代詞

- (1)人称代詞…一人称：余(『素問』65例)，吾(同3例)，我(同2例)。  
二人称：汝，若。  
三人称：其(『素問』1684例)，之(同2586例中主語0)。
- (2)指示代詞…近指代詞：是(同221例)，此(同314例)，然(122例)，  
「氣をつけよう! 熱氣慄悍，藥氣亦然。 — 『素問』腹中論  
暮世之治病也，則不然。 — 『素問』移精變氣論  
必先知經脈，然後知病脈。 — 『素問』三部九候論  
『然』は「このよう」という様態の代替詞か「～後」として「その後」の意味。  
焉(同34例)。  
遠指代詞：彼(同5例)，夫(同156例)。
- (3)疑問代詞…誰(同1例)，孰(同13例)，何(同487例)  
安(同40例)，焉(同0例)，烏(同0例)，惡(同0例)。
- (4)特殊代詞…者(同1469例)，所(578例)。

### 6. 動詞もさまざま

- (1)名詞のように見えるが実は動詞。
  - ①名詞+代詞「之」：灸之則瘡，石之則狂。 — 『素問』腹中論
  - ②副詞+名詞：春善病黝衄，仲夏善病胸脇。 — 『素問』痺論
  - ③名詞+于，於：膚脹者，寒氣客于皮膚之間。 — 『靈樞』水脹

(2)名詞や形容詞の意動用法(～を～とみなす)。

余子萬民，養百姓，而取其租稅。 —『靈樞』九針十二原

美其食，任其服，樂其俗。 —『素問』上古天真論

(3)名詞や形容詞の使動用法(～を～のようにする)。

四日鋒針，取法於絮針，筒其身，鋒其末。 —『靈樞』九針

人之所以成生者，血脈也。故爲之治，針必大其身，而員其末，令無得傷肉分。

—『靈樞』九針

(4)動詞の使動用法(～に～させる)。

天食人以五氣，地食人以五味。 —『素問』六節藏象論

## 7. 副詞もいろいろ

(1)程度副詞…更，甚，尤，最。(2)範圍・數量副詞…但，相，皆，尽，悉，卒，亟，數，復，亦。(3)状態副詞…固，卒，蓋，遂。(4)時間副詞…時，昔，嘗，已，將。(5)否定副詞…不，非，未，無，毋，弗，勿，莫。(5)謙敬副詞…請，謹，敢。

## 8. 於，以，爲，與の四字を押さえれば介詞はわかる

(1)於(于)：①動作の地点，位置，②～まで，③～より(=自，從)，④～を，⑤～に，⑥叙述の対象，⑦よりも，⑧～により(～される)，⑨～にとって，⑩～の中に在って。

(2)以：①用いて，②原因(=因)，③～と，④～の時点で，⑤動作主体の状況。

(3)爲：①～のために，②～と，③～のせいで，④～によって～される。

(4)與：①～と，②～のために。

## 9. 連詞も分類して覚える

(1)並列連詞：與，以，而，且 (2)順承連詞：則，即，乃，故，而，之

(3)転折連詞：然，但，仰，而 (4)選択連詞：若，如，將 (5)譲歩連詞：雖，縱，寧

(6)仮設連詞：若，如，苟 (7)因果連詞：以，故，爲，由，則

## 10. あとは助詞さえわかればこっちのもの

(1)語氣助詞

①也 主語+也+謂語/分句+也+分句=句中停留の語氣：明乎哉問也。(=問也明乎哉) —『靈樞』經筋：其始生也，大如鷄卵。 —『靈樞』水脹

判断句+也=終結，肯定の語氣：風者百病之始也。 —『素問』生氣通天論

疑問句+也=疑問の語氣：其故何也。 —『靈樞』論勇

②焉 一般状況の叙述(継続)の語氣：用鍼之服(服，事也)必有法則焉。 —『素問』八正神明論

③矣 完了状況の叙述の語氣：論要畢矣。 —『素問』玉版論要

④是非疑問句+乎=是非疑問の語氣(肯定か否定の答えを問う)

婦人無須(鬚)者，無血氣乎。 —『靈樞』五音五味

⑤選択疑問句+耶，乎=選択疑問の語氣(二つ以上の状況を列挙し選択を問う)

此痛在血脈之中耶，將在分肉之間乎。 —『靈樞』周痺

⑥限定句+耳=限定の語氣：人之所有者，血與氣耳。 —『素問』調經論

⑦感嘆句+哉，乎哉：感嘆の語氣

⑧夫，(句首)=発議の語氣：およそ～というのは

夫水者，循津液而流也。 —『素問』逆調論

⑨其(句首)=推測の語氣：恐らく～であろう

其惟砭石鉞鋒之所取也。 —『靈樞』玉版

⑩その他。時間副詞+哉(語氣を休める)の変形：昔在 —『素問』上古天真論

(2)結構助詞「之」

①名詞+之+名詞 「私の本」の「の」：君主之官 —『素問』靈蘭秘典論

②主語+之+謂語 ある句を子句や分句に変える

此聖人之治身也。(聖人治身を此を主語とする子句に) —『素問』陰陽応象大論

病之始生也，極微極精，必先入結於皮膚。(病始生を主語・病を共有する分句の第一に) —『素問』湯液醪醴論

③名詞A(主語)+名詞B(定語)+之+所+動詞：AがBに～される(受動式)

三百六十五穴，鍼之所由行也。 —『素問』氣穴論

## 11. 以，爲，之など詞類間に使われるものをチェック

(1) 持其脈口人迎，以知陰陽有餘不足。 —『靈樞』終始

因果連詞で，上句の状況に「よって」下句である。

(2) 不爲汗衰，狂言不能食。 —『素問』評熱病論

介詞で汗の「せいで」なく～である。

(3) 風雨之傷人奈何。 —『素問』調經論

結構助詞で，「風雨傷人」という句を子句(奈何の主語)にする。

(4) 壯火，之氣衰，少火，之氣壯。 —『素問』陰陽応象大論

順承連詞で，火気が壯んであれば「すなわち」元気が衰える。

## 面白語法学 その2 (句法)

## 1. 句子を構成する要素，句子成分とは？

意味の単位である詞のまとまりである句子(文)は言説(メッセージ)の単位であり、句子の構成単位として次の6種の句子成分がある。句子成分は詞、または詞のまとまりである詞組、または句子を構成する小さな句子からなる。

## 主語・謂語・賓語は句子の幹

句子の言説の陳述対象を「主語」、陳述内容を「謂語」といい、謂語中に動詞がある時に、動詞の対象となる「賓語」をともなうことがある。句子を樹木にたとえると主語、謂語、賓語はその幹であり、これらなしには樹木がなりたたない。

①主語：「誰が」、または「何が」を表す。普通は名詞、代詞または名詞性詞組\*。

水冰，地坼。 — 『素問』四氣調神大論(名詞)

余欲臨病人。 — 『素問』移精變氣論(代詞)

風者，百病之始也。 — 『素問』生氣通天論(名詞性詞組)

\* 詞組が一つの名詞に相当するもの。

②謂語：主語について「～である」「～をする」を表す。述語。普通は動詞、形容詞または動詞性詞組。

髮長，齒更。 — 『素問』上古天真論(動詞)

其地高。…其地下。 — 『素問』異法方宜論(形容詞)

脈不通，則氣因之。 — 『素問』舉痛論(動詞性詞組)

③賓語：「～を」「～に」として謂語動詞の対象となる、目的語。名詞、代詞または名詞性詞組。

夫善用針者，取其疾也，猶拔刺也，猶雪汚也。 — 『靈樞』九針十二原(名詞)

故寫者，迎之，補者隨之。 — 『靈樞』終始(代詞)

營其逆順出入之會。 — 『靈樞』九針十二原(名詞性詞組)

## 定語・状語・補語は句子の枝葉

句子の樹木の枝や葉となるのが名詞を修飾する定語、動詞や形容詞を修飾する状語である。これらは修飾される語、中心詞の前にあるが、補語は謂語の後にくる。

④定語：主語や賓語の前においてその性状、数量、所属などを表す。連体修飾語。

雖有大風，苛毒，弗之能害。 — 『素問』生氣通天論

⑤状語：謂語の前において動詞や形容詞を修飾する。

刺諸熱者，如以手探湯。 — 『靈樞』九針十二原

⑥補語：謂語の後において動詞や形容詞を説明する。

灸窮骨二十壯。 — 『靈樞』癰狂

## 2. 句子成分は詞序を決定する？

句子を構成する句子成分の関係はその序列である詞序を決定する。「君問」は主謂関係、「問君」は動賓関係を表す。「まず例外を覚えよう!」

## ①主謂倒装—謂語が主語の前にあるとき

句子成分の中で主語と謂語は特に「主要成分」、「基本成分」と呼ばれ、重要である。普通は主語が前、謂語が後にくるが、次のような例外がある。

(1)自然現象などの慣用

復則炎暑，流火。 — 『素問』氣交變大論(火<sup>星</sup>の<sup>名</sup>が流れる)

(2)強調のための倒装

昭乎哉問也。 — 『素問』天元紀大論(問いは昭乎たるものである)

## ②賓語前置—賓語が動詞や介詞の前にあるとき

普通は動詞が前、賓語が後にくるが次のような例外がある。

(1)動詞に不、毋、無、未、莫等の否定副詞がつき、賓語が代詞であるとき。

勿之深斥。 — 『素問』調經論

弗之能害。 — 『素問』生氣通天論

不之疾寫，不能移之。 『靈樞』通天

(2)賓語が疑問代詞であるとき。

夫血之與氣，異名同類，何謂也。 — 『靈樞』營衛生會

陰陽不調，何補，何寫。 — 『靈樞』根結

五脈安出，五色安見。 — 『靈樞』五閱五使

また介詞の後の名詞や代詞も賓語であるが、疑問代詞であるとき介詞が後になる。

精神内守，病安從來。 — 『素問』上古天真論

何以知藏府之脹也。 — 『靈樞』脹論

## ③定語後置—定語が修飾する語の後にあるとき

普通は定語は修飾する主語や謂語(中心詞)の前にあるが、「中心詞+之+定語+者」という構文において定語が後にくるもの。

脈之見者，皆絡脈也。 —『靈樞』經脈  
人之善飢而不嗜者，何氣使然。 —『靈樞』大惑論

### 3. 句子にもいろいろあるのだ！

①主語の省略：次のような場合、主語が省略されて無主語に見えるもの。

(1)対話における省略

帝曰、癩疾何如。岐伯曰、脈搏大滑、久自己。 —『素問』通評虛実論  
(「岐伯曰」以下において主語は「癩疾」。)

(2)前句の主語を承けた省略

陰陽者天地之道也。萬物之綱紀。變化之父母。生殺之本始。神明之府也。  
—『素問』陰陽応象大論  
(「陰陽者」という主語が二句以下で省略。)

(3)前句に提示された賓語を承けた省略

上古有真人者。提挈天地。把握陰陽。呼吸精氣。獨立守神。 —『素問』上古天真論

②無主語句と無謂語句：本来主語や謂語を持たない句子もある！

(1)「有～」で始まる句子は無主語

有病温者、汗出輒復熱。 —『素問』評熱病論

(2)諺など普遍的な言説は無主語

譬猶渴而穿井。 —『素問』四氣調神大論

(3)「況～」で始まる句は無謂語

凡此五者、各有所傷。況於人乎。 —『靈樞』五变

### 4. 句子が句子を構成している！

①包孕句—一つの母句が小さな子句を内包しているもの

主謂詞組が主語、謂語、賓語あるいは定語などとして一つの母句に内包されている構造を、「包孕句」という。

邪之中人也、無有常。 —『靈樞』邪氣臟腑病形(主語)

此皆人之所明知。 —『素問』微四失論(謂語)

余聞上古有真人者。 —『素問』上古天真論(間の賓語)

②複合句—さらに大きな句子を構成しているもの！

普通の句子が結合して大きな句子となっているとき、その一つ一つの句子を「分句」

大きな句子構造を「複合句」という。分句の結合関係から大きく「連合句」と「偏正句」に分ける。連合句においては分句と分句の関係は並列的で対等であり、偏正句においては意味的に軽い前の「偏句」と、意味的に重い後の「正句」の間に「因果」「転折」「条件」などの関係が分けられる。

連合句：分句が対等、表現が拡張できる

(1)連環式：前後の分句が意味をリレーして行くもの。

女子七歳、腎氣盛。 —『素問』上古天真論

(2)並列式：前後の句が対を成しているもの。

齒更、髮長。 —『素問』上古天真論

(3)選択式：各句が並立して選択に任されるもの。

材力盡邪、將天數然也。 —『素問』上古天真論

偏正句：分句の間に論理関係があり、閉鎖的

(4)因果式：分句の間に因果関係があるもの。

心動、則五藏六府皆揺。 —『靈樞』口問

(5)転折式：前後の句の意味が相反するもの。

清陽實四支、濁陰歸六府。 —『素問』陰陽応象大論

(6)譲歩式：前句が譲歩して後句が正意を述べるもの。

雖有大風苛毒、弗之能害。 —『素問』生氣通天論

(7)条件式：前句が条件を、後句が結果を述べるもの。

上下不并、良醫弗爲。 —『素問』生氣通天論

(8)仮設式：前句が仮定を、後句が推測の結果を述べるもの。

若有乾聾、耳無聞也。 —『靈樞』厥病

#### 語法による原典修正の例

黃帝、問于岐伯曰、人焉受氣、陰陽焉會。何氣爲營、何氣爲衛。營安從生、衛于焉會。 —『靈樞』營衛生會

『甲乙』卷一第十一では「于焉」を「安從」に作る。「疑問代詞が動詞や介詞の賓語となる時、その前に置かれる」という規則は厳格であるから、当然「焉于」の誤りであろう。(錢超塵『内經語言研究』) —これを正してはじめて「營安從生」と「衛焉于會」は「対偶をなす互文」という修辭概念により、「營衛はいづこより生じ、いづこに会するか」と解釈されよう。

※演習一 詞類と句子成分（「素問」微四失論の場合）

黄帝在明堂。雷公侍坐。黄帝曰，夫子所通書，受事，  
 名 動 名 名 動 名 動 代 特代 動 名 動 名  
 主 謂 賓 主 謂 主 謂 定 主<sub>1</sub> — 主<sub>2</sub> —

（母句，複合句の成分となる子

衆多矣。試言得失之意，所以得之，所以失之。雷公  
 形 助 副 動 名 助 名 特代 動 代 特代 動 代 名  
 謂 — 狀 謂 賓<sub>1</sub> — 賓<sub>2</sub> — 賓<sub>3</sub> — 主

句・分句中の成分は省く）

對曰，循經受業，皆言十全。其時有過失者，請聞  
 動 動 名 動 名 副 動 名 代 副 動 名 特代 副 動  
 謂 謂 賓 謂 賓 狀 謂 賓 主 — 狀 謂

其事解也。帝曰，子年少，智未及邪。將言以雜合  
 代 名 名 助 名 動 代 形 名 副 動 助 副 名 連 動  
 定 賓 — 主 謂 主 謂<sub>1</sub> 謂<sub>2</sub> — 狀 謂<sub>3</sub> —

耶。夫經脈十二，絡脈三百六十五，此皆人之所明知，工  
 助 助 名 數 名 數 代 副 名 助 特代 動 名  
 — 主<sub>1</sub> 補 主<sub>2</sub> 補 主<sub>3</sub> 狀 定 謂<sub>1</sub> 定

之所循用也。所以不十全者，精神不專，志意不理，外內  
 助 特代 動 助 特代 副 形 名 名 副 形 名 副 形 名  
 謂<sub>2</sub> — 主 — 謂<sub>1</sub> — 謂<sub>2</sub> — 謂<sub>3</sub> —

相失，故時疑殆，診不知陰陽逆從之理。此治之一失矣。  
 副 動 連 副 動 動 副 動 名 助 名 代 名 助 數 名 助  
 — 謂<sub>4</sub> — 謂<sub>5</sub> — 賓 — 主 謂 —

受師不卒，妄作雜術，謬言爲道，更名自功。妄用砭石，後  
 動 名 副 動 動 名 名 動 名 動 名 副 動 動 名 副  
 謂 賓 謂 — 謂 賓 賓 謂 — 謂 賓 狀 謂 謂 賓 狀

遺身咎。此治之二失也。不適貧富貴賤之居，坐之薄  
 動 名 名 代 名 助 數 名 助 副 動 名 名 助 名 名 助 形  
 謂 賓<sub>1</sub> 賓<sub>2</sub> 主 謂 — 謂 — 賓<sub>1</sub> — 賓<sub>2</sub> —

厚，形之寒溫。不適飲食之宜。不別人之勇怯。不知比類。  
 形 名 助 名 副 動 名 助 名 副 動 名 助 名 副 動 名  
 — 賓<sub>3</sub> — 謂 — 賓 — 謂 — 賓 — 謂 — 賓 —

足以自亂。不足以自明。此治之三失也。診病，不問  
 動 連 副 動 副 動 連 副 動 代 名 助 數 名 助 動 名 副 動  
 謂 賓 — 謂 謂 賓 — 主 謂 — 謂 賓 謂 —

其始。憂患飲食之失節，起居之過度，或傷於毒，不先  
 代 名 名 名 助 動 名 名 助 動 名 副 動 介 名 副 動  
 賓 — 主<sub>1</sub> 主<sub>2</sub> 謂 — 賓 主 謂 — 賓 謂 — 賓 — 謂 —

言此。卒持寸口，何病能中。妄言作名，爲粗所窮。此治  
 動 代 副 動 名 代 名 動 動 名 動 名 介 名 縱 動 代 名  
 賓 — 狀 謂 賓 主 — 謂 — 賓 謂 賓 定 — 謂 — 主 謂

之四失也。是以世人之語者，馳千里之外。不明寸尺之  
 助 數 名 助 連 名 助 名 縱 動 數量 助 名 副 動 名 助  
 — 定 — 主 — 謂 賓 — 謂<sub>1</sub> — 賓 —

論，診無人事。治數之道，從容之葆，坐持寸口。診不中五  
 名 名 動 名 名 助 名 名 助 動 副 動 名 名 副 動 名  
 — 謂<sub>2</sub> — 主 — 謂 — 狀 謂 賓 主 謂 — 賓

（從容を葆とす）

脈百病所起，始以自怨，遺師其咎。是故治不能循理，棄  
 — 縱 動 副 連 副 動 動 名 代 名 連 名 副 動 動 動  
 — 狀 — 謂 謂 賓<sub>1</sub> 賓<sub>2</sub> — 主 謂 — 謂

術於市。妄治時愈，愚心自得。嗚呼窈窈冥冥，熟知道。道  
 名 介 名 副 動 副 動 名 副 動 嘆 形 形 代 動 名 名  
 賓<sub>1</sub> 賓<sub>2</sub> — 狀 謂 狀 謂 主 狀 謂 狀 — 主 謂 賓 主

之大者，擬於天地，配於四海。汝不知道之論，受以明爲晦。  
 助 形 縱 動 介 名 動 介 動 代 副 動 名 助 名 動 介 形 動 形  
 — 謂 — 謂 — 主 謂 — 賓 — 謂 —

# わくわく修辞法

## 1. 修辞？修辞学？修辞法？

古くは『易』文言伝に「辞を修め其の誠を立つるは業に居る所以なり」とあり、言説の伝達効果を増強するために詞を選び、句子の形式を考え、文章の構成に手を加える技術を「修辞」といい、言語学の一分野として言語表現の手段である修辞の規則や方法を研究する学問を「修辞学」という。現代の修辞学では明確に理解されることを目的として字句を調整することを「消極修辞」、いきいきとした印象を与えることを目的として字句を修飾することを「積極修辞」というが、後者に属する技法を呼ぶのに従来「修辞法」という語が用いられた。



段逸山『中医文言修辞』（上海中医学院出版1987年）によれば「古代医学の著作は一般の古漢語著作と同じではなく、中医著作は医学内容を述べ、科学技術文体に属する。医学内容は明白を要とし、科学技術文体は平直をよしとするため、一般古漢語著作に常用された誇張、双関（懸詞）、飛白（言い間違えのこじつけ）、精警（警句）等の文芸的色彩の濃厚な辞格（修辞形式）」は中医著作においてはきわめて少ない。

しかしまた同時に症候や脈象等の特殊現象の描写に当たって「一般古漢語には用いられない独特の文体」や「比喻、模状（疊字の擬態語）、相形（形容）等の様子を表す言い方の修辞」が豊富に発達した（同書）。

以下に『中医文言修辞』にしたがい、二十種類の修辞形式を六つに分類し、東洋医学原典における用例を見て、詞句解釈の参考としよう。

## 2. まわりくどい言い方—引用，委婉，割裂

### ①引用：先人の言論を引いて表現に重みを持たせること

先人の著述の詞句を引用する「引経」、故事を引用する「用典」、文献の出所を明示する「明引」、そうでない「暗用」がある。原典の知識がないと読み誤る。

陰脈榮其藏，陽脈榮其府，如環之無端。 —『靈樞』脈度

戰勢，不過奇正。奇正之變，不可勝窮也。奇正相生，如循環之無端。 —『孫子』勢篇

### ②委婉：凶事，粗野・卑俗な事柄をいいかえる

小大不利，治其標，小大利，治其本。 —『素問』標本病伝論

辰有十二，人有足十指莖垂，以應之。 —『靈樞』邪客

### ③割裂：「四十而不惑」から四十歳を「不惑」というようないいかえ

陰陽者萬物之能始也。 —『素問』陰陽応象大論

乾知大始，坤作成物。乾以易知，坤以簡能。 —『易』繫辭伝

## 3. 様子を表す言い方—比喻，模状，借代，相形

### ①比喻：ある概念を印象の強いものに譬える

効之信，若風之吹雲，明乎，若見蒼天。 —『靈樞』九針十二原

このとき、「効之信」「明乎」は「正文」，「風之吹雲」「見蒼天」は「喻文」，「若」は喻詞と呼ばれる。この三成分がそろっているものが「明喻」，喻詞が省略されたものが「暗喻」である。正文も省略されたものは「借喻」といわれる。

水病人，目下有臥蚕。 —『金匱要略』水気病脈証并治

### ②模状：疊字の擬態語・擬声語で描写する

瘦人者，皮薄色少，肉廉廉然。 —『靈樞』逆順肥瘦

喘息喝喝然。 —『靈樞』雜病

### ③借代：「年月」を「星霜」や「春秋」というようないいかえ

倉廩不藏者，是門戸不要也。 —『素問』脈要精微論

倉廩是水穀を納める脾胃，門戸は二陰に開竅する腎のいいかえ。

膈育之上，中有父母。 —『素問』刺禁論

父は心の，母は肺のいいかえ。

### ④相形：描写対象と対比的なものを列挙する

太陽病，小便利者，以飲水多，必心下悸。小便少者，必苦裏急也。 —『傷寒論』

弁太陽病脈証并治

## 4. 変化を持たせる言い方—避複，錯綜，分承，倒装

### ①避複：同字の重複を避ける

民病少腹，控牽，引腰背。 —『素問』至真要大論

人吸者隨陰入，呼者因陽出。 —『難經』十一難

帝曰，願盡聞之。岐伯曰，請遂言之。 —『素問』六元正紀大論

瀉虛補實，神去其室，致邪失正，眞不可定。 —『靈樞』脹論

②錯綜：上下句の均整をわざと破る（詞のジャンルや詞序を変える）

(1)錯名：上下句で詞のジャンルを変える

是以春夏歸陽爲生，歸秋冬爲死。 — 『素問』方盛衰論  
食穀欲嘔，屬陽明也，吳茱萸湯主之。得湯反劇者，屬上焦也。 — 『傷寒論』  
弁陽明病脈証并治（陽明は中焦）

(2)錯序：上下句の詞序を変える

手太陽之上，血氣盛，則有多須，面多肉以平，血氣皆少，則面瘦，惡色。 —  
『靈樞』陰陽二十五人（「惡色」が主謂倒装）  
巨陽之脈，則腫首，頭重。 — 『素問』厥論（「腫首」が主謂倒装）  
刺腫搖鍼，經刺勿搖。 — 『素問』診要經終論（「經刺」が賓語前置）

③分承：複数の詞組が上下句にまたがって語法関係を持つ

(1)順承：AA' BB' → AB, A' B'

天有四時五行，以生長收藏，以生寒暑燥濕風。 — 『素問』陰陽応象大論

(2)錯承：AA' BB' → AB', A' B

頭項，強痛。 — 『傷寒論』弁太陽病脈証并治

(3)複雑分承：三つの句にまたがった分承

皆因其氣之虛實，疾徐以取之，是謂因衝而寫，因衰而補。 — 『靈樞』邪客

④倒装：主謂，動賓以外の詞序の倒置

各以其時受月，則病已矣。 — 『素問』痿論（「受時」の倒置）  
太陽病，小便利者，以飲水多，必心下悸。小便少者，必苦裏急也。 — 『傷寒論』  
弁太陽病脈証并治（「以飲水多」は「太陽病」につづく）

5. 引き締まった言い方 — 省略，挙隅，互備

①省略：前後関係から詞句を省くもの

肝痺者，夜臥則驚，多飲，數小便，上爲引如懷。 — 『素問』痺論（「引」は少腹に引く，「懷」は「懷妊」の略という）

②挙隅：同様の言い回しが並列するときその一部を省くもの

人右耳目，不如左明也。 — 『素問』陰陽応象大論（聡を省く）  
疾而徐出，邪氣乃出。 — 『靈樞』官能（疾「入」を省く）  
生長之門。 — 『素問』四氣調神大論（收藏を省く）

③互備：上下句それぞれの一片を合わせて完全な意味をなす（互文）

五藏有俞，六府有合。 — 『素問』痺論（五藏六府有俞有合の略）  
鍼石之敗，毒藥所宜。 — 『素問』示從容論（鍼石・毒藥之敗，鍼石・毒藥所宜の略）

6. 詞句を揃えた言い方：対偶，排比，反復

①対偶：上下句の語法が等しく字数が同じ

(1)正対：上下句の意味が類似

倉廩不藏者，是門戸不要也。水泉不止者，是膀胱不藏也。 — 『素問』脈要精  
微論（倉廩不藏は大便秘，水泉不止は小便の失禁）

(2)反対：上下句の意味が異なる

智者察同，愚者察異。 — 『素問』陰陽応象大論

(3)串対：下句は上句の内容を承ける（流水対）

生而神靈，弱而能言。 — 『素問』上古天真論

②排比：語法が等しく字数が同じ句が三つ以上並ぶもの

萬物之綱紀，變化之父母，生殺之本始。 — 『素問』陰陽応象大論  
中部天，手太陽也。中部地，手陽明也。中部人，手少陽也。 — 『素問』三部  
九候論

③反復：同義や類義の詞を併用する

和於術數。 — 『素問』上古天真論  
在臑腫魚腹之外。 — 『素問』刺腰痛（臑腫と魚腹之外）  
脈有逆從。 — 『素問』平人氣象論（反義→語法その1，1.(2)偏義複詞）

7. 立て板に水の言い回し — 層遞，頂真，共用

①層遞：語法，字数の類似した句が「小から大（等）」へ移行する

脈有一呼再至，一吸再至。有一呼三至，一吸三至。 — 『難經』十四難

②頂真（連珠）：上句の末尾の詞，詞組または子句が下句の頭になる

恐則精却，却則上焦閉，閉則氣還，還則下焦脹。 — 『素問』挙痛論  
邪在府則陽脈不和，陰陽不和則氣留之，氣留之則陽氣盛矣。 — 『靈樞』脈度  
少陽脈弱而澀，弱者微煩，澀者厥逆。 — 『傷寒論』平脈法

③共用：複数の並列した句で主語，謂語，定語等を共有する

陰陽者天地之道也，萬物之綱紀，變化之父母… — 『素問』陰陽応象大論

東洋医学原典の修辞法を学ぶには

- 一 先人の注釈を注意して学ぶこと。
- 二 修辞形式の主要特徴をよく覚えること。
- 三 いくつもの修辞形式を兼ね備えた文章に気をつけること。

（『中医文言修辞』より）

「第4章わくわく修辞法、2まわりくどい言い方、①引用」のところでふれた、中国の古典籍にあらわれた名言の引用例を、『素問』と『靈樞』からいくつか紹介しておきたい。

(1)天食人以五氣。地食人以五味（『素問』六節蔵象論）

玄は天である。人においては鼻である。牝は地である。人においては口である。天は人を食<sup>え</sup>なうのに五気をもってし、地は人を食<sup>え</sup>なうのに五味をもってする。（『老子』6章「谷神不死。是謂玄牝」の河上公注）

河上公注では「谷神不死」は「神を養えば不死なり」とされ、その秘密である玄牝を説明した一節である。

(2)如臨深淵（『素問』宝命全形）

虎を素手で打ち、激流を歩いて渡るのは危険だ。人々は一つの見解だけにとらわれて他を知らないが、戦々恐々として深淵に臨み、薄氷をふむように慎重におこなうべきである。（『詩』小雅・小旻）

『詩』では狭い見識から堂々巡りの議論をすることなく、国政の難局を切り抜ける態度が「如臨深淵」と譬えられるが、『論語』で両親に孝であるために身体を無傷に維持して行く苦勞をあらわした言葉に引かれる。

(3)如環之無端（『靈樞』脈度）

いくさの形も奇（遊撃隊）と正（正規軍）しかないが、奇と正があい呼応連携して数え切れない無数の形を生み出す様は、環の上をどこまでもたどるように限り無い。（『孫子』勢篇）

この兵学思想は、左右の両拳が互い違いに撃ち出されて、敵につけいるすきを見せない中国拳法の基本技である「雲手」にも伝えられている。『靈樞』脈度では、陰脈と陽脈がたがいに絡いあいながら臓腑をめぐるさまを譬えた。

(4)視之不見。聽而不聞（『靈樞』賊邪）

視ても見えないものを名づけて夷<sup>い</sup>（色が無い）といい、聴いても聞こえないものを名づけて希<sup>き</sup>（声が無い）という。（『老子』十四章）

鬼神の徳<sup>ちから</sup> というものは盛んで、視ても見えず、聴いても聞こえない。物の形をとって伝えることができない。（『礼記』中庸）

(5)若亡若存（『靈樞』官能）

上士は道を聞いて勤めてこれを行い、中士は道を聞いて存するごとく亡するごとく、下士は道を聞いて大いに笑う。（『老子』四十一章）

後漢・馬融の「長笛賦」にも微かな笛の音を譬えて用いる。「官能」では邪が人中<sup>ちゆうちゆう</sup>に中<sup>ちゆう</sup>って「若亡若存」であるときに上工はその萌芽を救う、という。

## 書物の生命を知る版本学（1）

### 1. なぜ版本学を学ぶのか

書物の発生から現在にいたる材料、装丁、書き込み方などの変遷を包括的に研究する学問を中国で「版本学」という。あたかも海に生命が誕生して脊椎動物の魚類となり、陸に上って両生類、爬虫類、哺乳類と分化してさらに霊長類から人類となったように、先史時代の土に書かれた絵文字のメッセージから、木や竹を綴り合わせた書物が出来、紙の巻き物となり、閲覧に便利のように折りたたまれ、糸で綴じた冊子となり、ついに印刷したいわゆる「版本」となる。しかし人類の遺伝子に十億年の生命分化の歴史が刻まれているように、二千年前に成立した東洋医学の古典には当時から現在にいたる書物の発展の歴史が反映しているのではないだろうか。いまその一例をあげると…

近者編絶、久者簡垢。〔近き者は編絶し、久しき者は簡垢づく。—『靈樞』禁服〕

とあるように、『素問』『靈樞』などの東洋医学の古典は成立した頃は「簡冊<sup>かんさく</sup>」という、木や竹製の細長い板（簡）を紐（編）でつづり合わせた姿で、用いられた書体も篆書（ハンコの書体）や隸書（新聞の題字に見る書体）であった可能性が強い。

足陽明之脈、起于鼻之交頰中。—『靈樞』経脈

この「鼻之」は「鼻上」の「上」の篆書「上」を「出」（之）と誤ったもので、

〔足陽明の脈は、鼻に起こり、上りて頰中に交わる〕

と読むのが正しいとする説がある（馬継興『中医文献学』473頁）。

孫絡水溢、則経有留血。—『素問』調経論

この「水」は「外」の隸書「水」の誤りともいう（馬継興、前掲書474頁）。いずれもこれらの古典がかつて篆書や隸書で書かれた簡冊であったという知識によって、始

めて原典を正しく読み直すことができるかも知れない例である。版本学は二千年の歲月をへた書物に生命をとりもどす学問といえるかもしれない。

## 2. 簡冊に始まる

「冊」字は甲骨文一期（前14世紀）にすでに見られ、「𠄎」と書かれた。これは『説文解字』に「𠄎」とある、漢代には儀礼的なものとなってさらに数百年伝えられた「冊命」（王から諸侯に下す任命書）の原形と見られる。「策」も同じ。

策書。策とは簡である。『礼』にいう「百文に満たざれば策に書かず」と。長さ二尺を制とし、短いものはこの半ばである。その次々びは一長一短とし、編<sup>び</sup>を両<sup>つ</sup>にする。篆書を用い、「何年何月何日、皇帝曰う、以て諸侯王三公に命ず」のように書く。—『独断』（漢代の諸制度をしるす）

百名以上は策に書き、百名に及ばないものは方に書く。—『儀礼』聘礼

文献に残る冊命は平均して百字余りであり、冊の象形の通り二尺の長簡3本と間に入れた一尺の短簡2本に大字で書けばちょうどよい分量である。簡が幅5分であるのに対し「方」とは何行も書ける幅の広い簡のことで「版」または「牘」ともいい、手紙のことを「尺牘」というのは長さ一尺の牘に書かれたことに由来する。普通の文書は簡も方も長さ一尺。冊（策）字は転用して一般の書籍の意味にも用いられる。

『（孝経）鉤命決』にいう、「『春秋』は二尺四寸にこれを書き、『孝経』は一尺二寸にこれを書く」と。そこで六経の策は皆長さ二尺四寸といったことが知られる。—鄭玄『論語』序

漢代には『論語』『孝経』は「伝」（経典の注釈・解説）とされ、経を記す簡よりも短い簡に記されたというのである。1959年武威漢墓出土の『儀礼』土相見礼は長さ56センチ、古注である「服伝」はそれより短い50センチの簡に書かれている。

このように一巻が一定の長さの簡で編まれた冊を「簡冊」という。今世紀になってから中国西北の砂漠地帯で、さらに近年湖北、湖南両省でも簡冊の発見が相つぎ、その中には医書の類も多く含まれている。しかしこれらの簡冊は現在のところ現存する古典の成立した昔の姿を彷彿とするにとどめ、『儀礼』や1972年臨沂銀雀山漢墓出土『孫子』のように昔の姿の実物が出土するには残念ながら至っていない。

簡冊が使用された時代にも文字は他の材料にも記された。それは金石であり、また帛<sup>はく</sup>—絹織物である（1973年長沙馬王堆漢墓出土『老子』等）。

## 3. 巻軸の写本時代（三～十世紀）

墨書した字を刀で削り取れる木や竹の簡と違い、紙は書かれた文書の信用度が高く、また帛より安価なので製造技術の発達にともなって広く普及し、簡は冊命や私信、メモなどにしばらく残る他、紙にとって代わられる。

紙の書物は何枚かの紙を貼り継ぎ、一つなぎにして巻かれた。巻き物の中心には必ず軸があるので「巻軸」という。軸は瑠璃や象牙、金象嵌の漆塗りなどで、巻き物の左端にあり、外側に当たる右端には標<sup>ひょう</sup>と呼ばれる錦や絹が貼られて巻き物を保護する役目を果たした。標の端には帯があって巻き物をしばり、帯の先には象牙製などの籤<sup>せん</sup>があって帯を留めた。巻軸は書棚の上で転がって数が多いと混ざりあってしまうため5～10巻の一纏めずつ「帙<sup>し</sup>」と呼ばれる包みにしまわれた。

巻軸の写本は簡冊と同じ高さ一尺の一枚に20行位の罫線を薄墨で引いて、一行に17字前後から20字位書かれるのが普通で、3～5尺から数丈の長さがあった。簡冊よりもずっと薄い紙の巻軸は1巻に簡冊数巻分もの内容を取めることができた。

…恐散於末学、絶彼師資。因而撰註、用伝不朽。兼旧歳之卷、合八十一篇、二十四卷、勒成一部。〔末学を散じ、彼の師資を絶えんことを恐る。因<sup>ゆ</sup>に註を撰し、用<sup>も</sup>て不朽に伝う。旧歳の巻を兼ね、合わせて八十一篇、二十四卷、勒して一部を成す。〕—『素問』王冰序

『素問』の旧本が九巻であり、第七巻が失われていたものを唐の中期の人である王冰が発見して合計八十一篇を新たに二十四巻に編集したのである。ここでの篇は簡冊の巻数であり、巻はもっぱら紙の巻軸書の巻数であることは論をまたない。簡冊の時代には巻も篇も同じように用いられていたのだが、巻軸の普及とともに意味が分化してしまった。簡冊で出土した儒教の経典である『儀礼』の一篇が現在でも一巻と呼ばれるのはまれに「巻」の古義が保たれた例であろう。

巻軸の医書は現在までかなり発見されており、その多くは唐代までの写本かその姿を留める後代の写本であり、つぎのものは特に重要である。

中国写本（敦煌出土）—『素問』三部九候論 『傷寒論』断片（三種）

『本草経集注』断片（二種） 『新修本草』断片（四種）

日本写本—『黄帝内経太素』三十巻（中二十五巻） 『黄帝内経明堂』断片

『傷寒論』（康治本、康平本） 『真本千金要方』三十巻（中巻一）

『新修本草』二十巻（中十巻） 『医心方』三十巻

この他、刻石書もいずれも断片が数種発見されている。

#### 4. 木版綴じ本の出現まで

巻軸の写本は巻末に近いほど検索に手間が掛かり不便だった。そこでこれに数行ごとに互い違いに折り目をつけると、一卷の途中のどの箇所でも好きなように開き、簡単に閉じられる折り本ができる。漢訳仏典が盛んに読まれた唐初にこうして「経折」が出現した。唐末にはこうした経折を改良して、貼り継ぐ前のばらばらの紙葉を綴じる「冊葉」と呼ばれる帳面型の本が作られた。年少者の学習用の『兎園冊』という本の書名は九世紀にはこの便利な冊子形式が登場していたことの証拠ともいわれる。

世界最初の印刷物は奈良時代の「百万塔陀羅尼」とされている。高さ6センチ長さ24～52センチの巻き物四種に経文が印字されたものである。しかし「印刷」とは版面に紙を当てて裏を擦って印字するので、刻字面を紙の上に当てて捺したものは「印」と呼ばれて区別される（紙に朱印を捺したものは6世紀にさかのぼる）。井上清一郎氏は墨のたまり具合などからこれは木印に墨を付けて紙の上に捺したことを証明した。版木の上に紙を載せて印刷した現存する最古の例は唐末の868年の『金剛般若経』の巻き物である。さらに五代の949年には同じく冊子が現れる。

記録に残るもっとも古い医書の印刷は唐・玄宗（8世紀初）の『広濟方』にさかのぼり、ついで敦煌出土『新集備急灸経』甲本（861年写本）がもとづいた長安の印本といわれる。このような初期の医書の印刷本は曆や寺院のお札、初等教育の教科書などのように写本で作られる部数では間に合わない大衆的な性格のものに含まれたもので、印字状態も不鮮明であった。

五代には国家事業で儒教の經典である九經の印刷が行われたことが記録に残る。漢以来、經典を一字の間違ひもなく後世に伝えるために「石經」を刻んで首都の太学の門に置いて国家の威信を表す伝統があったが、ついに印刷はその位置をしめるにいたったのである。さらに宋代になると、印刷技術も格段と向上し、製紙工業の発展と相俟って各種の書籍が次々と綴じ本の形で印刷された。

五代の九經をついだ北宋政府の出版事業は石經にかわる「正經」を揃えるため、文字を校訂して正誤を正すことを目的としていた点で初期の印刷物や民間の出版がたんに流通を目的としていたことと一線を画す。医書もその例外ではなかった。

[仁宗（北宗の皇帝1023～1063）、聖祖の遺事の將に地に墜ちんとするを念い、廻すわち其の学がくに通知せる者に詔して之を是正せしむ。臣等、之を承けて校を典つかさどり、伏して念うこと旬歳、遂に乃ち中外を搜訪し衆本を襲集し…又漢・唐の書録、古医經の世に存せる者を採り、数十家を得、叙して考正す。]—『素問』新校正序より

校正医書局の仕事はこのようなところに位置していたのである。

## 書物の生命を知る版本学（2）

### 1. 冊子本の装丁

巻軸装に代わって唐初に経折装の書物が登場し、さらに一枚ずつの紙葉を綴じた冊葉装が唐末から宋初の書物の主流となっていた。冊葉装には次のように三つの発展段階があるといわれる。

- (1)胡蝶装—紙葉を印字面が向かい合うように二つ折りし、書背を糊打ちして貼り合わせる。
- (2)包背装—紙葉を印字面を背中合わせに二つ折りし、書背を丈夫な表紙で包む。
- (3)線装（糸綴じ）—紙葉を印字面を背中合わせに二つ折りし、書背に孔を開けて糸で綴じ合わせる。

線装は古書の仕立て直しが容易で閲覧に便利なため、明末から清初にはほとんどの書物に採用されるようになった。そこで本章では線装の書物の外形を説明し、次章ではその印字面の款識（とりきめ）についてのべる。

書衣、書口、書背、書根—書衣（書皮）は表紙のことで、冊子本のもっとも外側にある。染色した丈夫な紙や絹・綾などの材料が使われ、左端に長方形の「書簽いせん」（題簽）と呼ばれる紙や布を貼り、書名、巻数を書いた。左の紙葉の折り目を合わせた面を書口、右端の糸の綴じ目に区切られた部分を書脳、書脳に挟まれた切り口を書背という。また下の切り口を書根といい、書物を書棚に積み重ねるとき外から見える部分なので、検索に便利のように書名、巻数を書くこともあった。

副葉、封面—書衣を開くと内側に一枚の紙が裏打ちされていて、副葉（護葉、付葉）といわれる。さらに書物の上に一葉の、書名や著者名、刊行者名を書いた紙があることがあり、封面（扉葉）といわれる。

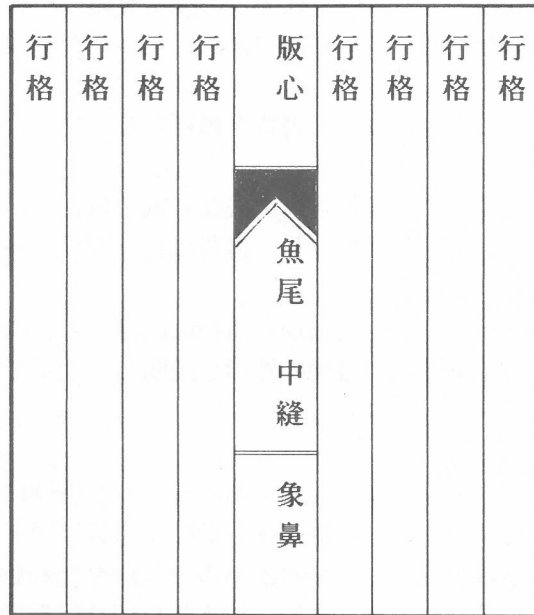
針眼（綴じ孔）、訂線（綴じ糸）—線装本は書衣をつける前に紙縫りで仮綴じをし、書衣をつけて針眼（綴じ孔）を開けるが、朝鮮本は五針眼、和本と唐本は四針眼が普通だが唐本は中央の針眼の間隔が狭いのが特徴。訂線（綴じ糸）は絹で、本の厚さに応じて厚手の本は太い糸、薄い本は細い糸を用いる。

書函—日本では帙と呼ばれるが、偏平な冊子を納めるには函はこが用いられる。上下の面を除く四面を包む四合套、上下を含む六面を包む六合套等の折り畳み式の書套、より堅牢な木匣、夾板、現代の書架に立てられる紙匣などがある。

## 2. 版本の款識

欄、行格、版心—印刷された一枚の紙葉には印字部分を取り囲む「欄」（辺欄、框、欄框）と呼ばれる枠取りがあり、一本の太い線だけのものを単辺、内側に細い線のあつものを双辺という。左右が双辺のもの、四周が双辺のものがある。

欄内の本文が印字される空間を行格、行格を分ける線を行線と呼ぶ。また一枚の紙葉を折り畳んだときに折り目になる部分を版心（版口）と呼び、版面の顔とでもいふべき重要な部分である。



象鼻—版心を上下三分するとき上下両端になる部分を象鼻という。白地のものを白口、黒線のあるものを黒口といい、線が細いものを小黒口、太いものを大黒口と呼ぶ。

魚尾—版心の折り目の印を魚尾という。白抜きのを白魚尾、黒いものを黒魚尾、模様付きのを花魚尾、上下に二つあるものを双魚尾、一つのを単魚尾、上向きのを倒魚尾と呼ぶ。

口題—上下の象鼻の間を中縫と呼ぶが、これらの空間に書名、巻数、葉（丁）数、刊行者名、刻工名等を記したものを合わせて口題と呼ぶ。宋版の書物で書名を記す場合は少なく、あつても一、二字を記すのみ。刊行者名は欄外の左下に、刻工

名は下端に記される。

特殊記号—魚尾、象鼻などの一般的なしるしのほかに、すべての版本に共通してみられる訳ではない次のような記号がある。

- (1) 篇・章号—一篇、または章の区切りは改行するが、その冒頭に一つの○（圈点）等をつけたもの。
  - (2) 闕文号—古書を刊行する際に原書の闕文（不明字）を□（白框）または■（墨釘）であらわし、将来善本によって補刻されることを期待するしるし（待補号）。
  - (3) 補文号—古書を刊行する際に原書の闕文を補刻したことをあらわす闕文（墨圈）、（白字陰文）などの表示。
  - (4) 重文号—ある文字が繰り返されるととき後出の文字を省略したことを表す「リ、＝、ケ、ヒ、マ」のような記号。
- 書牌（刊記、木記）—文様等のある小さな枠取りに刊行者名等を記したもの。

## 3. 主要医書の版本の沿革

### (1) 北宋および南宋刊行の医書

刊行者によって版本は①官刻（官公庁）、②私刻（家塾）、③坊刻（書店）の三種に分けられるが、官刻は印刷もよく、校勘の精確を期しており、私刻がこれに次ぎ、坊刻は材料や労力を費やして精確をめざすより利益の追求を第一としているので質においてもっとも劣る。

北宋では多くの官公庁で官刻本が作られたが、1057年、医書の校訂出版のために設けられたのが校正医書局である。ここで次のような重要医書が刊行された。

- 『傷寒論』10巻（1065年、影印本、翻刻本が現存）
- 『金匱玉函経』8巻（1066年、翻刻本が現存）
- 『備急千金要方』30巻（1066年、翻刻本が現存）
- 『重広補注黄帝内经素問』24巻（1068年、影印本、翻刻本が現存）
- 『脈経』10巻（1068年、翻刻本が現存）
- 『黄帝針灸甲乙経』12巻（1069年、翻刻本が現存）

影印本とは原刊本の姿形（字形、行数等）をそのままに倣って刊行したもの、翻刻本は原刊本をテキストにして版の大小、体裁などは恣意的に改変してしまうものをいう。『千金方』の翻刻本は南宋官刻本が現存。『傷寒論』と『素問』に影印本が現存するのはそれぞれ明代のもの。他のものはすべて原形を留めない数次の翻刻本で、明末から清初のもの。北宋末には太医局が医書の刊行をつかさどる。

『黄帝針経』巻数未詳（1093年、佚亡）高麗献本をもとに官刻

しかし南宋時代になると国勢の衰えを反映して中央官庁での医書の刊行はきゅうに少なくなってしまう。そして北宋時代にはめだたなかった地方官刻本や私刻本が多くなってくる。

『靈枢経』24巻（1155年、影印本、翻刻本が現存）成都・史嵩刊（私刻本）

南宋初の学者・王応麟によれば『針経』の首篇は「九針十二原」で『靈枢』の首篇は「精気」であったという。すると『靈枢』史嵩刊本は官刻『針経』の翻刻校訂であったかも知れず、史嵩序に「この書を秘書省国子監（すなわち政府の出版局）に送る」といっているのは今後の官刻の底本たらしめようという目的からであったようだ。

しかし医書によっては原形を留める翻刻どころか官刻のまともな記録さえない場合もある。『難経』について王応麟は「1026年、晁宗慤、王挙正等に命じて『素問』『難経』『諸病源候論』が校定され、翌年国子監から刊行された」と書いている。馬継興はこれをもとに「王惟一が当時、翰林院の医官の任にあり、撰修した『銅人腧穴針灸図経』（官刻本）が1027年に正式に刊行されている。これは王惟一が『難経』の校勘者であったと考えさせるに十分である。また世に伝わる『難経集注』各巻首に『王翰林集注八十一難経』とあるのが証拠である」という（中医文献学103頁）。

## (2)元・明および清刊行の医書

元代の官刻本は種類も数も少なく、医書はわずかしかない。地方官刻本でも同様である。代わって私刻本、坊刻本は官刻本をはるかに越える。

宋の官刻本を翻刻した12巻本『素問』、また史嵩刊本の翻刻である12巻本『靈樞』等を出した胡氏古林書堂、『脈経』等を出した葉氏広勤堂、『銅人経』等を出した熊氏衛生堂、この他にも多くの商業書店があった。だが『句解八十一難経』等、刊行者の不明な書物も多い。

明代は官刻、私刻、坊刻ともに前代をうわまわる。中央政府の太医院では『銅人経』『図注難経』等、南京国子監では『脈訣刊誤』、藩王府では趙簡王府の12巻本系『素問』および『靈樞』、『脈経』等が主要な官刻本として出された。この時代には私刻本で高い水準のものがあ、顧從徳の北宋官刻『素問』影印、趙開美の北宋官刻『傷寒論』影印、刊行者未詳の史嵩刊『靈樞』影印等は宋本影印を尊重する学風の成果である。また熊宗立、薛己、呉勉学等は多くの古医書の翻刻本や注釈を刊行した。

そのほか明、清を通じて「内府写本」と呼ばれる皇帝個人の閲覧用に清書された書物があり、清の「四庫全書」には多くの医書がある。

清代にも宋本影印は続けられ『金匱玉函経』等が出された。清末には日本刊本が渡来して「守山閣叢書」に『素問』『靈樞』『脈経』等とならんで『難経集注』が収められ、また『黄帝内経太素』が刊行された。

## (3)日本刊行の医書

日本における医書の刊行は1528年、堺の阿佐井野宗瑞が明の熊宗立刊『医書大全』を翻刻したのに始まる。続いて1536年、朝倉領の越前一乗谷でやはり熊宗立の『勿聴子俗解八十一難経』が刊行される。続く安土桃山時代、明代からようやく行われていた活字印刷技術が朝鮮経由で導入され、江戸初期まで200種ともいわれる古活字医書が作られて日本の江戸時代の医学興隆の基礎になったとは小曾戸洋博士の説である。

1652年には北宋官刻本をもとに何代にもわたって翻刻補注を加えられてきた『難経集注』の明刊本による版本が出された。江戸前期は中国テキストおよび注解の導入・翻刻の時代、中期は日本人の手による研究・注解書が蓄積され、後期には清朝の文献考証学の学風に影響されて、江戸医学館を中心とする医家たちがおおいに古医書の文献研究を展開し、その影印出版をも行った時代であると言える(小曾戸博士)。

『難経集注』明刊本1652年翻刻本翻刻出版(1804年)

『千金要方』南宋翻刻本30巻影印出版(1849年)

『医心方』12世紀写本30巻影印出版(1859年)

さらに仁和寺に伝わった『太素』古写本を用いた『素問』『靈樞』の研究、明・趙開美本『傷寒論』の影印出版、その他古刊本・抄本(写本)の調査、発見など、系統的で精確な業績は正しく評価され受け継がれなければならない。

## 校勘—書物の病を治す方法

### 1. 校勘は書物のあるべき姿に戻す作業

版本の歴史からわかるように、書物は成立年代が古いほど多様な素材や形式に作り替えられ、複製に複製を重ねて現在に伝わるために、書写や版刻に際して誤りを生じることが多い。その結果、文字学ないし語法学の知識だけでは理解できない文面になってしまい古典の研究者を悩ませることになる。

無実、無虚。損不足、而益有余、是謂甚病。—『靈樞』九針十二原(底本)

「無実、無虚」とは何の事か意味が通じない。しかし『太素』、『素問』鍼解の王冰注の引用する『鍼経』、また『難経』八十一難の字句により「無実実、無虚虚(実を実せしむこと無く、虚を虚せしむこと無かれ)」が本来の形であり、また「甚病」も「重病(病を重くする)」の誤りであったことがわかる。

同様に

経曰、虚虚、実实、補不足、損有余。此其義也。—『金匱要略』卷上第一

という語句も『鍼経』の原文が引用されていたものがかなり変形して伝写されていたものであることがわかる。

このように同一の字句を存する複数の伝本資料によってその字句の本来の姿を求める作業を「校勘(校訂、校讐)」という。このとき、まず「底本」を定めなければならない。『靈樞』についていえば、多くの伝本の中から例えば明・刊行者未詳の南宋私刻刊本の影印(明刊無名氏本)を「底本」に選び、これを他の伝本(明・趙府居敬堂本、1601年医統正脈全書本等)や、『靈樞』を引用する他書(『素問』『難経』『甲乙』『太素』等)を「校本」として一字一字比較検討するのである。

校勘の結果、新たに伝本を作るとき、底本の文字を全然改めない方法を主本法(あるいは死校)、本来の正しい形に改めるものを主善法(あるいは活校)という。校勘してわかった底本と諸校本の異同を注記したものを「校注(校勘記、考証、考異)」という。校注にはすべての異同を書き記す「全注」と、要点のみを書き記す「節注」の二つの方式がある。

## 2. 校勘の種類

①対校 —— ある医書についてその最善の版本(抄本)を選んで底本とし、同書の他の版本(抄本)を校本として、すべての字句を比較対照した結果、底本と校本の異なる点を列挙して校注に記すもの。

五藏之氣，已絶於内，而用針者，皮實其外。—『靈樞』九針十二原(底本)  
五藏之氣，已絶於内，而用鍼者，反實其外。—同(趙府居敬堂本，校本2)

底本(無名氏本)の「皮」をある校本(趙府居敬堂本)に「反」に作っている。

②本校 —— 底本の校勘箇所と別の箇所にある同一の字句を比較対照して異なる点があるものを指摘して記すもの。(校本1)

五藏之氣，已絶於内，而用針者，皮實其外。—『靈樞』九針十二原(底本)  
所謂五藏之氣，已絶於内者，脈口氣内絶不至。反取其外之病。—同・小針解

①の例で底本と校本に相違のあった「皮」を「反」で解釈している。校本の原校勘者は恐らくこのような本校の結果、本文の「皮」を「反」に改正したもの。

③他校 —— 底本の校勘箇所を引用している他書を比較対照して異なる点があるものを指摘して記すもの。

A. 經氣已至，慎守勿失者，勿變更也。深淺在志者，知病之内外也。近遠如一者，深淺其候等也。如臨深淵者，不敢墮也。手如握虎者，欲其壯也。…—『素問』鍼解  
B. 鍼耀而均…伏如橫弩，起如發機。帝曰…經氣已至。…—『素問』宝命全形論  
C. 夫先令鍼耀…目無外視，手如握虎，心無内幕，如待貴人。…察日時之興衰，伏如橫弩，起如發機。—竇漢卿『鍼經指南』

Aの校本3『素問』鍼解はおおむね「九針十二原」の字句を解釈している篇であるが、下線の字句は現在の「九針十二原」には見られないものである。Bの校本4宝命全形論にもAと共通の字句がある。さらにCの校本6元代の「鍼經標幽賦」を見ると、AにないBの字句も含めて釈文が加えられているので、旧『鍼經』にこれらの字句があったことが知られる。「虎とは兇兵する合図の玉符のこと」という森立之の説からも「握虎」と「發機」の連続に意味のあることがうかがわれる。

④理校 —— 従うべき校勘資料がないときに、文理(文意が合理的か)および医理(前後の医説とあうか)から判断して底本の字句の正誤をさだめるもの。戦国末の『呂氏春秋』に子夏が「三豕涉河」を「己亥涉河」に正したとあるのが最古の理校。

## 3. 校勘の作業対象—書物の病の種類

簡冊書では簡の脱落、墨の剥脱、帛や紙の書物は虫食い腐食などの自然的な変形があり、また書写や版刻を行った人の内容についての誤解や無知による人為的な誤りがある。その結果として生じる字句の混乱を段逸山『医古文』(人民衛生1986)では「衍、脱、倒、訛、錯簡」の五種に分け、馬継興『中医文献学』(上海科技1990)では「脱文、衍文、顛倒、訛誤、疑似、異文、混乱、その他」の八種に分けている。

段氏の「錯簡」は原因が簡冊の綴じ違いによる字句の混乱をいい、馬氏の「混乱」は結果として底本の字句に現れる混乱を指すので馬氏に従う。また底本と校本の字句の相違が是非の決定を致さないとき、これを「異文」と称する。ただ「疑似」は「脱衍倒訛」の疑いをはさむ意味なので取らない。したがって「脱衍倒訛異乱」の六種に分けるのが適当である。「その他」とは避諱改字(皇帝の名を避ける)などである。

①脱 —— 原文にあった1字、2字、あるいは数字、または一段落が脱落して底本に残っていないもの。9頁の1章に引いた『靈樞』九針十二原の例は原本の「無実実、無虚虚」から「実」と「無」がそれぞれ1字ずつ脱落し、また『金匱要略』の例は「無」が2箇所とも脱落したものであると考えられる。

②衍 —— 原文に無い字句が誤って書き込まれたもの。

刺諸熱者，如以手探湯。—『靈樞』九針十二原(底本)

刺熱者，如以手探湯。—『太素』卷二十一・諸原所生(校本8)

「諸熱」という表現は他に例が無く、『太素』と比較して諸は「衍」と思われる。

③倒 —— 原文の字句が上下転倒しているもの。

正指直刺，無針左右。—『靈樞』九針十二原(底本)

正指直刺，鍼無左右。—『太素』卷二十一・九鍼要道(校本7)

『太素』の文は『素問』鍼解王冰注と一致し、『靈樞』が2字誤倒(互乙)である。

④訛 —— 謬、誤とも。主に伝写の際に誤って別字を書いたもの。

余哀其不給，而屬有疾病。—『靈樞』九針十二原(底本)

余哀其不終，而屬有疾病。—『太素』卷二十一・九鍼要道(校本7)

属は恤で哀と同義、有も或と通用する代詞。疾病と対応する不終を不給と誤る。

⑤異 —— 底本と校本に相違があって正誤を決しがたいもの。

方刺之時，必在懸陽及與兩衛。—『靈樞』九針十二原(底本)

方刺之時，必在懸陽及與兩衝。—『太素』卷二十一・九鍼要道(校本7)

『甲乙』の注によると「兩衝」に作る一本もあった。

⑥乱 —— 改編による正文中の混乱、正文と古注文の混合などの錯雑。10頁③例の『素問』鍼解や宝命全形論は『靈樞』九針十二原の佚文をふくむ。また『靈樞』小針解は同じく「小針之要」以下の数段を注釈するが、「虚実之要」「九針之名」等の数段を欠く。鍼解や小針解の成立時の九針十二原はかなり違う姿だったと思われる。

#### 4. 校勘の注記方式（『靈樞』九針十二原を底本として主本法による）

底本の脱衍倒訛および乱，校本の異等の注記方式は次のようである。

①脱 例文—所言節者，神氣之所游行出入也。—底本

注記—『素問』調經論王冰注引『鍼經』，神上有皆字。—郭霽春『靈樞校注』  
調經論の「三百六十五節」の所に王冰が引用する「『鍼經』曰」の文に「皆神氣出入游行之所」とあること。校本5調經論王冰注引用の『鍼經』にあつて底本にない「皆」の字が1字脱落していると考えられる。「（某本）□上（または下）有□字（□□□三字）」のように底本に無く校本にある字を表す。主善法の場合は「□字原脱，掇（某本）補」のように書く。

②衍 例文—刺諸熱者，如以手探湯。—底本

注記—『太素』卷二十一・諸原所生，無諸字。—郭霽春『靈樞校注』

11頁の②例で示したように『太素』の該当箇所を比較対照してみると「諸」の字が見られない。「諸熱」という用法が異例であることから考えても（医理に合わない）「諸」字は原本になかったものが後に加えられたと考えられる。「（某本）無□字」のように校本に無い字を表す。主善法では「□下原有□字，掇（某本）刪」。

③倒 例文—正指直刺，無針左右。—底本

注記—『太素』卷二十一・九鍼要道，無針作鍼無。—郭霽春『靈樞校注』

11頁③例で示したものの。底本の「無針」は原本の「針無」が入れ代わったと考えられる。例のように「（某本）□□，作□□」の他，「（某本）二字互乙」とも書く。主善法では「原作□□，掇（某本）改」と書く。

④訛 例文—余哀其不給，而屬有疾病。—底本

注記—『太素』卷二十一・九針要道，給作終。—郭霽春『靈樞校注』

11頁④例で示したものの。底本の「給」は原本の「終」が誤って書き換えられたと考えられる。このように単なる異文ではなく明らかに訛であることを「A当作B」（AはBとするべきである）のように書く。主善法で「原作A，掇（某本）改」とする。

⑤異 例文—方刺之時，必在懸陽及與兩衛。—底本

注記—『太素』卷二十一・九針要道，衛作衛。—郭霽春『靈樞校注』

11頁⑤例で示したものの。底本と校本の相違を記すのみで正誤の判断が付かないときに，「A（某本）作B」のように書く。これは主善法でも経文を改めるわけではないので同じように書く。

⑥乱 例文—陰有陽疾者，取之下陵三里。—底本

注記—下陵二字，似係三里之傍注，伝抄誤入正文。—郭霽春『靈樞校注』

「下陵三里」という表現が異例であること，『靈樞』本輸に「下陵膝下三寸，肝骨外三里也」とあり下陵と三里が同義であることから注文の混入とする。乱には一定の注記方式はなく，さまざまな方式によって記されている。

## 第 8 章

# 訓詁—書物の生命を活かす方法

### 1. 訓詁は古医籍解説の方法

成立年代の古い書物について，その意味の難解な箇所を異本と照合して相違を記す「校勘」に対して，難解な文字の用例を古典の中に探り，最も適当な意味を見出さず方法を「訓詁<sup>くんご</sup>」という。校勘が正文の本来あるべき姿を求める作業であるのに対して，訓詁は現在あるがままの正文の解釈を文字学的な専門知識に求める作業であると言える。『易』象伝の「需，須也」（需は須<sup>ス</sup>つなり）や「師，衆也」（師は衆なり），また『儀礼』喪服の「伝曰，命婦者，其婦人之為大夫妻也」（伝に曰く，命婦とは其れ婦人の大夫の妻たるなり）は正文中に取り入れられたもので「正文訓詁」といわれる。『靈樞』小針解が「九針十二原」の注解であつて，正文に取り入れられているものがこれに相当する。

また『礼記』喪服小記が『儀礼』喪服の注解であるように，ある古典中の文章の注解を別の古典に取り入れたものがある。『素問』鍼解が『靈樞』九針十二原の注釈文であるのがこれに相当する。このようにともに古典として扱われるものは『経籍纂詁』凡例で「経伝本文に即ち訓詁有り」と言われるもので，最も古い注解文の形態である。

やがてある典籍について一貫して訓詁を示す形式が確立し，訓詁の類集である『爾雅』や文字学思想によって訓詁と音韻を包括した字書である『説文解字』が登場すると，訓詁の適用は一般化し，医書においても呉の呂広の『難経』注，六世紀初の全元起の『素問』注等が作られる。

唐代には訓詁学は集大成の時代を迎え，『五経正義』（儒学の主要五典籍の注疏—正文と注文に対する注解）や『文選』の注が成立し，医書においても楊上善の『太素』注，楊玄操の『難経』注，王冰の『素問』注等が書かれた。

宋の仁宗の時には五経に重要参考典籍である『論語』『孝経』『孟子』『爾雅』等を加えた『十三経注疏』が成立しており，この頃に校正医書局による『素問』等の注，また王惟一による『難経集注』等が世に出た。

宋末から明まで朱子学が興隆して訓詁の思想性が希薄になり，清代になってようやく漢学主義を奉じた考証学（考拠学）が用いられ，中国學術史で最高の成果を達成して日本に伝わり，この影響を受けること大であった江戸医学館を中心とする人々が独自の訓詁研究を行い，多紀元簡『素問識』『靈樞識』，多紀元胤『難経疏証』，多紀元堅『素問紹識』，渋江全善『靈樞講義』，森立之『素問攷注』等になった。

## 2. 医籍訓詁の流れ

①「小針解」と「鍼解」——すでに述べたように『靈樞』小針解と『素問』鍼解はともに『靈樞』九針十二原の最古の注解であると見なされる。

(A) 凡用針者，虚則實之。—九針十二原

所謂虚則實之者，氣口虚，而當補之。—小針解

岐伯對曰，刺虚實之者，鍼下熱也。氣實乃熱也。—鍼解

(B) 滿則泄之。—九針十二原

滿則泄之者，氣口盛，而當寫之也。—小針解

滿而泄之者，鍼下寒也。氣虚乃寒也。—鍼解

(C) 宛陳則除之。—九針十二原

宛陳則除之者，去血脈也。—小針解

宛陳則除之者，出惡血也。—鍼解

(D) 邪勝時則虚之。—九針十二原

邪勝時則虚之者，言諸經有盛者，皆寫其邪也。—小針解

邪勝時則虚之者，出鍼勿按。—鍼解

②全元起の『素問』注——五～六世紀南朝の通史である『南史』卷五十九にある学者・王僧孺(465-522)の伝に、

[僧孺は属文に工みにして楷隸を善くし、多く古事を識る。侍郎・全元起、『素問』を注せんと欲し、訪うに砭石を以てす。僧孺、答えて曰く、古人は当に石を以て針と為せるべく、必ずしも鉄を用いず。『説文』に此の「砭」字有り。許慎云う、「石を以て病を刺す也」と。(『山海經』の)「東山經」に「高氏の山に針石多し」と。郭璞(注に)云う「以て砭針を為す可し」と。…季世、復た佳石無く、故に鉄を以て之に代うるのみ]

とある。全起の砭石についての注解は「宝命全形論」の新校正注に残る。

③楊上善の『太素』注——新校正は「隋の楊上善、纂して『太素』を為す」とするが、唐の高祖・李淵の諱を避けて「太淵」を「太泉」にしていることなどから唐初の人と思われる。楊上善は正史の目録により『老子』注、『莊子』注等の訓詁著作があったことが知られ、『爾雅』『説文』を始めとする漢代の経伝訓詁の学風を正しく踏まえていることがわかる。

(A) 刺寒虚者，得鍼下熱，則爲實和也。(卷十九設方・知鍼石)

(B) 刺熱實者，得鍼下寒，則爲虚和也。(同)

(C) 宛陳，惡血。(同)

(D) 勿按者，欲洩其邪氣也。(同)

類，鼻茎也。(割經脈・胃足陽明の注) 顛，頂也。(同・膀胱足太陽の注) 瘡，不能言。(同・經脈病解の注) 嗌，喉也。(卷二十六寒熱・癰疽の注) 砭，以石刺病也。(同) 仁，親也。覺也。(卷二十八風・痺論の「不仁」の注) これらはともに『説文』に見られる注と同じ。

また楊上善は「名物訓詁」(あるものをそう呼ぶいわれの解釈)を得意とする。

手魚，腕前大節之後，狀若魚形，故曰手魚。(卷十一輪穴・本輸「魚際」)

さらにいわゆる「音義」説(経伝解釈のこじつけに利用された近似音解釈)に堕さない「通仮」の概念が見られる。

附，当為膚。古通用字，故為附耳。当尺裏以上皮膚，以候胸中之病。(卷十五診候之二・五臟脈診の「附上以候胸中」の注)

④王冰の『素問』注——王冰は『素問』序に唐・代宗の宝応元年(762)の記述があり、唐中期の人と思われる。

(C) 宛，積也。陳，久也。除，去也，言絡脈之中，血積而久者，鍼刺而除去之也。

(D) 邪者，不正之目，非本經氣。是則謂邪，非言鬼毒精邪之所勝也。出鍼勿按，穴俞且開，故得經虚，邪氣發泄也。

宛は『集韻』(宋の韻書)によれば「蘊」と同じく、「蘊，積也」は『玉篇』に、「陳久」は『書』注に、「除，去也」は『玉篇』に見える。

「A讀為B」(AはBの通仮)、「A当為B」(AはBの訛)等の注記方式はかなり厳密に守られている。また語法についての注記が見られる。

石，謂以石鍼開破之。(腹中論「石之則狂」の注)

というのは「石」が名詞ではなく、動詞であることに注意を促す記述である。

⑤林億等の「新校正」注——宋初の新校正注は校勘を重んじて、全元起本や『太素』の引用を多く残しただけでなく、「通仮」字の問題をさらに追求して王冰等の訓詁の誤りをも正そうとした。

新校正曰，按，此論味過所傷，難作精神長久之解。古文通用，如膏梁之作高粱，草滋之作草茲之類。蓋古文簡略字，多假借用者也。(『素問』生氣通天論「味過於辛，筋脈沮弛，精神乃央」の王冰注に「央，久也。辛性潤澤，散養於筋，故令筋緩，脈潤，精神長久…」とある箇所)

新校正曰，按，全元起本，募作膜。『太素』巢元方並同。「拳痛論」亦作膜原。(瘡論「邪氣内薄於五藏，横連募原也」の王冰注に「募原，謂兩募之原系」とある箇所)

また多義詞の解釈や、語法および句読の正誤にも注意を払い、文字学や音韻学の観点からも分析を加え、さらに校本ばかりか『玉篇』『廣韻』等の使用字書の書名を明らかにして後学の便に備えた。

### 3. 訓詁の方法－詞義解釈の実際

①形訓（以形索義）——文字の形・音・義はともに訓詁の手掛かりとなるが、とくに形の分析によって詞義を求める方法を「形訓」という。

『説文』の字義解釈は多く形訓を主とし音・義を説く。

神，天神引出萬物者也。从示申。（申は神の古字）—第一篇上

肩，膊也。从肉，象形。—第七篇下

しかし『説文』の拠った篆文・古文は漢字の成立時からすでに千年余をへて原形を留めないほど変化したものもある。「行」は彳や子に關係無い十字路の象形であるし、「東」は日や木によらない袋の象形であった。形訓の限界はおのずから知られよう。

爲命門在兩腎之間，上通心肺，開竅于舌下，以生津。故古人製活字，從水，從舌者，言舌水可以活人也。—明・李中梓『内經知要』道生の『素問』刺法論注  
『説文』では「活」の旁は舌ではなく昏なのである。

②声訓（因声求義）——同字，同音字，近音字をもってある字の詞義を求める方法を声訓という。しかし通訓の法則を逸脱し，ほしいままに古典籍の詞義を変えて思想体系の論拠とする，今文派儒学の影響が大きい。古文派に属する『説文』の中にも五行・四方・干支の呼称などの今文的分野でそれが残っている。

—『説文』—

—今文文献—

東，動也。

東方者動方也。（白虎通）

子，陽氣動，萬物滋入，以爲稱。

陽氣至，孳養生。（三礼義宗）

やがて音韻論の発達から人々は牽強付会的な音義説を脱して，「古音によって古義を求める」という言語学的方法に到達する。通訓という新しく発見された音韻関係の知識によって，これまで解釈されなかった詞義が明らかになったのである。

夜臥，蚤起。楊注，蚤字，古早字。—『太素』順養

③義訓・釈音注（音釈）——形訓・声訓以外の訓詁に「訓詁の常法」ともいわれる「義訓」がある。「口，人所以言食也」（口は人の言<sup>の</sup>い食する所以なり—『説文』）のように直接的に詞義に言及する方法である。また韻書系の字書（文字を部首によらず韻部によって配列する）にならって「直音法」や「反切法」で音を示す注音方式があり，よく用いられている。

宛陳。上音壽，又音蘊。又於阮切。—九針十二原「音釈」

上は「宛」字のこと。「音□」は直音法で同音の字を示す。この宛が「菀」字に通じて『広韻』に「音鬱，義同」，『集韻』に「与蘊同」とあるのを引いている。「A B切（反）」はA字と声母をB字と韻母を同じくするという反切法の表示で『広韻』に「於阮切」とあるのを引く。音が三つで義もまたそれぞれ異なる。

岩井佑泉（いわい ゆせん）

昭和25年広島に生まれる。中央大学大学院文学研究科博士課程卒業（言語学専攻・文学修士）。東洋鍼灸専門学校卒業（鍼灸師）。日本医史学会会員として経穴名の由来，『医心方』病名和訓について等の東洋医学古典の言語学的研究を発表。日本内経医学会会員で，同会より本年出版予定の『難経集注』の校勘・解説を担当。

#### 東洋医学漢文入門資料集のお知らせ

「百聞は一見に如かず」といわれる通り，言葉による説明だけではともしれば分かりにくい，本書で例としている個々の事項について，一目で理解できるようにビジュアルな資料集を準備中です。東洋医学の主要古典から選ばれているものが多いので，そのまま古典読解の演習用にも使え，本書の内容にしたがって，校勘・訓詁などの実際の作業も体験できるものにする予定です。本年の連休頃にはお手許に届くでしょう。

B5版，約60～70頁 定価：2千円

#### 東洋医学漢文入門

岩井佑泉 編

平成6年4月1日発行

発行所・推気会

〒150 東京都渋谷区宇田川町36-2-712

電話 (03) 5458-5339

定価・一千円